

---

# 錬鉄の意志を受け継ぐ者

円卓の騎士王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

錬鉄の意志を受け継ぐ者

### 【Nコード】

N3433R

### 【作者名】

円卓の騎士王

### 【あらすじ】

アーチャーの全てを与えられた少女が真・恋姫無双の世界に行くことになった。この少女はこの世界でどのように生きていくのか？ タイトルには意志を受け継ぐ者とありますがアーチャーの能力を受け継いだだけです。間違えないようお願いします。

## プロローグ（前書き）

初めまして円卓の騎士王です。初めて小説を書くので駄文ですがそれでもいいという人は見てください。

## プロローグ

ここはどこじゃ？

気が付いたら、あたり一面真っ白な場所におった。  
本当にここはどこなのじゃ???

「ここは神の間です」

ふむ、神の間というのか・・・って!?!?  
声のしたほうを見ると、金髪の優男がおった。

「お主はだれじゃ？」

「私はあなたたちのところでいうと神様です」  
頭がおかしいのじゃろうか？

「私は頭がおかしくありませんよ」  
なぜわかったのじゃ!?!?

「心を読んだからです」  
むう、心が読めるとは。なら

「信じるしかないのう」

「ありがとうございます」  
それは置いといて

「それでその神様がなんのようじゃ？」

「一番疑問におもっておることじゃ。」

平凡な女子高生のわしに神様がなんのようなのじゃるか？

「それは私があなを殺してしまったからです」

「どういうことじゃ？」

「私があなをの寿命を書いた書類に

「コーヒ」をこぼしてしまったのです」

「そんな理由でわしは死んだのか!？」

「本当にもうしわけありません」

わしは死んでおったのか。

「ならわしの行く先は天国か地獄、どっちかの？」

わしがそういうと、なにやら神様が驚いておった。

「あなたは私を怨まないのですか!？」

「なぜお主を怨まなければならないのじゃ」

「私はあなを殺したも同然なんですよ!？」

「人間、いつかは死ぬのじゃしな。それが

早いか遅いかのちがいじゃろ」

これはわしの持論じゃかな。そのせいで友人に老けているといわれ  
たがの。

「あなたは優しすぎます」  
そう言うと神様は泣いてしまった。

「ぬお！？なぜなくのじゃ！？」  
ど、どうすればよいのじゃ！？  
神様はそのまま泣き続けた。

十分後

「落ち着いたかの」

「はい。見苦しいところをお見せしました」

やっと泣きやんでくれたのじゃ。

「それで、もう一度聞くがわしは天国と地獄、どっちにいくのじゃ  
？」

「あなたはどっちにも行きません」

「どづいいうことじゃ？」

「それは私のミスであなたを殺してしまいましたので  
あなたには転生してもらいたいです。  
ですが同じ世界には転生できません」

「なぜじゃ？」

「おなじ世界に転生させてしまつと世界のバランスが崩れてしまうからです。」  
「それならしかたないのう。」

「ならわしはどこに転生するのじゃ？」

「あなたには、真・恋姫無双の世界に行つていただきます。たしかわしの友人がやっていたゲームの名前じゃな。」

「そこはどんな世界なのじゃ？」

「簡単に説明すると、三国志の武将たちが全員性転換している世界です」

「それはなんとつか凄い世界じゃのう。  
じゃがわしがその世界に行つたところで  
すぐに死ぬのではないのか？」

「その心配はありません。私があなたに能力を与えます。  
あなたには Fate / stay night のアーチャーの全て  
を与えます」

「どんな能力なのじゃ？」

「説明するより渡すほうが早いのでいまからあなたにアーチャーの  
全てを渡します」

神様がさういうと神様の掌から光の球をだしてわしに投げてきた。  
光の球がわしにぶつかるといろんな記憶が流れ込んできた。

「今あなたには記憶にあるように  
投影、無限の剣製、経験、技能、才能の全てを渡しました」

「すごいものじゃな」

「そうですね。私もすごいと思いましたので」

「能力も渡したので今からあなたを転生させます」

「あのそのことなんじゃが、転生じゃなくて今のまま送ってくれぬ  
か？」

「どうしてですか？」

「赤ん坊からやり直しは勘弁してほしいのじゃ」  
「さすがに赤ん坊からやり直しは勘弁じゃ。」

「わかりました。あなたを原作の5年前に送ります」

「なぜ5年前なのじゃ？」

「その能力を使いこなすためです」  
「なるほど、それもそうじゃな。」  
「この能力はあくまで借り物使いこなすまでに時間がかかるじゃろう  
しの。」

「それでよろしくたのむのじゃ」

「わかりました。」

「いろいろとありがとうなのじゃ」

「いえこちらこそすいませんでした。  
それでは送りますね」

神様がそういうと足元に穴があいた。  
ちよつとまたんか!?

「じゃー」

## プロローグ（後書き）

見てくださりありがとうございます。これからもがんばって書いていくので見てください。

## キャラ設定(前書き)

今回はキャラの設定です。一部変なところがありますがスルーしてください。

## キャラ設定

名前 生前 雨宮刹那

転生後 性・桜 名・華 字・紅桜 真名・刹那

能力 筋力：C

魔力：A

耐久：B

幸運：D

敏捷：B

スキル 心眼（真）：A

魔術：C

千里眼：B

武器作成：A

宝具 無限の剣製：EX

性格 お人よし

趣味 家事全般とガラクタいじり

身長 178cm

体重 秘密じゃ

生前のオリ主は友人関係も広く、周りからも信頼されていました。オリ主の能力は基本的にアーチャーと同じですが、アーチャー+オリ主なので  
全ての能力が1ランクアップしています。  
スキルが一つ増えていますが気にしないでください。  
アーチャーの記憶を受け継いでいるので家事全般は得意になります。  
ます。

最後に一言お願いします

「こんな駄文でもよかったら見てほしいのじゃ」

## 2話（前書き）

今回は主人公がもらった能力の確認をする話です。  
キャラとのからみはもう少し待ってください

## 2話

ここはどこじゃ？

見たところ家の中みたいじゃが、なぜわしの部屋とおなじなのじゃ！？

む、机の上に手紙が置いてある。読んでみるとするかの。

「この手紙を読んでいるということは無事に着けたみたいですね。

そこは桃花村という村の近くの山の奥です。

その家の周辺に結界をはっていただきますので安心してください。

その結界が解除されるのは2年後ですのでその間に修行してもらいます。

それでは失礼します

b y 神様」

15

桃花村といえは劉備がいた村ではないか。

会ってみたいがまずは能力を確認しなければのう。

とりあえず外で練習しようかの。

まずは投影からじゃな。

「トレス・オン  
同調・開始」

思い描くは、かの赤い弓兵が使っていた黒と白の陰陽剣、干将・莫耶。

両手にズツシリとした感触がしてそこには思い描いた通り干将・莫

耶があつたのはよいのじゃが。

「重いのじゃ〜」  
重かつたのじゃ。

「これではまともに振れぬではないか」  
そうじゃ。たしかアーチャーの記憶の中に強化という  
魔術があつたはずじゃ。それをやってみようかの。

魔力で体を強化し、やっともてたのじゃ。

「さて、練習するでしょうかの」  
ひたすら干将・莫耶を振り続けたのじゃが、  
3時間振り続けておるのに汗すらかかるとはどうゆうことじゃ!?

『それは私があなたの体をいじつたからです』  
ぬお!?!いきなり話しかけるでない。びっくりするではないか。

『ふふ、それはすいません』  
まあ、それはよいのじゃが

「なぜわしの体をいじつたのじゃ?」

『それはいくら私があなたに能力を与えたからといって  
あなたの体は女性なのですから筋力を強化しておいたのです』

「それはありがたいの」

『それでは失礼しますね』

「いろいろとすまんの」

『いえいえ。もともと私のミスですから』

さて、では練習の続きをしましょうかの。

それから約12時間振り続け、あたりが暗くなってきたので終了した。

なぜか筆笥の中が四次ポケットみたいになっていて食材が豊富にあったのじゃ。

ここは中国じゃし中華料理をつくるとしようかの。

料理をしていて気付いたのじゃが、アーチャーの記憶を受け継いだせいか、

料理の技術がかなり上がっておったのじゃ。そのおかげで大量に作りすぎてしまったのじゃ。これ全部食べれるかのう。

次の日

今日は宝具を投影してみようかの。

目をつぶり、トリガーを引く。思い描くはかの騎士王が使っていた聖剣。

創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し、

製作に及ぶ技術を模倣し、

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現し、

あらゆる工程を凌駕し尽くし、

ここに幻想を結び剣と成す

目をあけると、手に金色の綺麗な剣があった

「うまく投影できたみたじやな」

アーチャーの記憶でもみたが、やはり綺麗な剣じゃのう。  
では真名解放してみようかの

「『エクスカリバー約束されし勝利の剣』」

や、やりすぎたのじゃー。山が一つ消し飛んでしまったではないか。

「これはよほどの時でないかぎり封印したほうがよさそうじゃな」  
この時代にこんなものを見せたら妖術と間違われそうじゃいな。

「宝具の投影は無事にできたし次は弓じゃな」

「トレース・オン  
同調・開始」

投影したのはアーチャーがよく使っていた黒い弓。  
そして1・2・3・4 km先の的を作った。

「記憶を見てわかっておったのじゃが、まさか4 km先の的まで見えるとはの」  
弓を構え、射つ。

1・2・3 kmは真ん中に命中したのじゃが、4 kmはすこし右にずれてしまった。  
もう少し練習せねば。

この日は弓の練習をし、あたりが暗くなってきたので終了した。



### 3話（前書き）

今回はやっと原作キャラに会いますがちょっと変なことになっています。

無茶な設定がありますがそれでもいいと言う人見てください。

### 3話

この世界にきて約2年たった。

あれから練習し続け、アーチャーの技術を完全に自分のものにした。それとセイバーの魔力放出を真似た移動方もつくった。

そういえばそろそろ結界が解除されるのじゃったな。

『はい。そうです』

「久しぶりじゃな。神様よ」

『そうですね。お久しぶりです』

「それで結界を解いてくれるのかの？」

『そうです。では解きますね』

周りを覆っていた結界が消えていった。

「ふむ、解けたみたいじゃな」

『はい。あ、あとその世界には真名というものがあります』

「真名？」

『真名とは字の如く真の名です。相手の許可を得ずに真名を呼んだ場合首をはねられてもしょうがないぐらい失礼にあたりま

す  
『

「そうじゃったのか。危うく首をはねられるところじゃった」

『そういえば、あなたの名前は決めましたか？』

「そうじゃったな。ここは中国じゃったな」

真名は刹那でいいとして性と名あと字を考えねばの。  
うーん、そうじゃー！

「わしはこれから性は桜、名を華、字を紅桜と名乗ることにしよう」

『わかりました。ではがんばってください』

「そつちもがんばるのじゃぞ」

『ふふ、わかりました』

では結界も解除されたし、旅にできるとしようかの。  
とりあえず、桃花村に行ってみようかの。

約30分ほど歩き続け、桃花村に着いた。

「できれば劉備に会いたいのが」

お、村の人じゃな少し話を聞いてみるとするかの。

「すまぬ。少し聞きたいことがあるのじゃがよいかの?」

「なんだい、嬢ちゃん?」

嬢ちゃんって、まあよいか。

「この村に劉備という人はおらぬか?」

「ん?劉備ちゃんに会いに来たのか?」

「んゝまあそんなところじゃ」

「それなら残念だったな。劉備ちゃんは今、筵売りに行っていていな  
いぜ」

ふむ、まだ関羽と張飛には出会っていないみたいじゃな。

「そうじゃったのか。ではまた来るとしようかの」

「そうだな。そのほうがいいと思つぜ」

「いろいろとすまぬな」

「いいつてことよ」

これからどうしようかの。

まあ、適当に旅をするとしようかの。

桃花村をでて3日ほど歩いていると村が見えたのじゃが、  
なんか様子が変じゃな。あれは……盗賊に襲われておるの  
か!?

急いでその村に行くと10人ぐらいの盗賊が好き勝手に暴れていた。

??? Side

私が住んでいた村が盗賊に襲われた。

兄上に隠れていると言われて隠れていたけど  
外が静かになってでていくと兄上が死んでいた。

「そんな……兄上……」

気づいたら私は叫んでいた。そのせいで盗賊に見つかってしまった。

「まだ生き残りがいたのか」

「お、中々美人じゃないか」

「お頭、こいつも連れて行きましょう」

「そつだな。そいつも連れて行け」

「了解しやしたお頭。へへ、残念だったな嬢ちゃん

ま、これも運命だと思つてあきらめな」

そついうとそいつは私のほうに手を伸ばしてきた。

いやだ。こんなやつらの慰み者になるなんて絶対にいやだ。

助けて、だれか助けてと思っていると

「またんか、戯けども」

声のしたほうを向くと

黒と白の短剣を持った女の人がいた

??? Side out

刹那 Side

干将・莫耶を投影し、急いで村に入るとほとんどの家が燃えておった。

わしが生き残りを探していると

「了解しやしたお頭。へへ、残念だったな嬢ちゃん

ま、これも運命だと思ってあきらめな」

声のしたほうを見ると、賊の一人が女子に手を伸ばしていた。

そんなことさせるわけにはいかぬ

「またんか、戯けども」

「なんだ？てめえは」

「すげえ美人じゃねえか」

「お前も混ぜてほしいのか？」

「ちげえねえ」

どこまでもゲスなやつらじゃな。

「なぜ混ぜらねばならんのじゃ、戯け。自分の顔を見てからいわんか」

わしがそういうと

「なんだとこのあま」

激昂した賊が斬りかかってきたが隙だらけじゃな。剣をよけ干将で首をはねた。

「な！？やりやがったなこのあま」

残りのやつらが一斉に斬りかかってきた。じゃがこの程度のやつらなら楽勝じゃな。

一番手前にいた賊に一瞬で近づき首をはね、振り向きざまにちかくにいた賊の首をはねた。賊が動揺した隙に6人の首をはねた。

「さてあとはお主一人じゃな」

「ま、待ってくれ。命だけは助けてくれ」

ふざけておるのか、こやつは。

今まで好き勝手しておいて命乞いじゃと。

「ならお主は今までそういった人を助けたのか？」

「くっそー」

いきなり斬りかかってきたが剣を破壊して首をはねた。  
初めて人を殺したのになんとも思わぬとは。精神もアーチャーと同じになっているからかの。  
さてとりあえず襲われていた女子を助けるとしようかの。

「大丈夫かの？」

刹那 Side out

??? Side

女の人に賊の一人が斬りかか行き、危ないと言おうとしたけどその心配はいらなかった。  
その女の人は一瞬で賊の首をはねると残りの9人も首をはねて殺してしまった。

「すごい・・・」

私はその女の人を怖いと思ったけどそれ以上にその強さに憧れた。10人いた賊をもともしない強さ。  
私もあんな風になれるのかな？と思っているとその女の人が声をかけてきた。

「大丈夫かの？」

「は、はい。大丈夫です」

「そうか。それはよかったのじゃ」

私がそう答えるとその女の方は胸をなでおろしていた。

「こんなことを聞くのは悪いとおもつのが、

お主の後ろにある骸はお主の関係者か？」

その女の方に言われて思い出した。兄上が死んでいることを。

「私の兄です」

私が答えるとその女の方は顔をゆがめ、

私に謝ってきた。

「すまぬ。わしがもう少し早く来ておればよかったのじゃが」

「そんなあなたのせいではありませんよ

悪いのは襲ってきた賊なんですから」

そうだこの人は悪くない。この人は私を助けてくれた。

「じゃがわしがもう少し早ければお主の兄を助けられたのじゃぞ？」

「それでもあなたは悪くありません。あなたは私を助けてくれました。  
た。

あなたが助けてくれなければ私は慰み者になっていたでしょう」  
もしこの人が来てくれなかったらと思うとゾツとする。

「お主は悲しくないのか？兄が亡くなっておるんじゃぞ？」

「それは……」

その女の人に言われて、じわりと涙がこぼれてきた。

「す、すいません。涙が止まらなくて」

止めようとしても次から次へと涙が溢れてくる。

その女の人に抱きしめられ

「がまんせずすきなだけ泣くといい。」といわれ

私は女の人胸で盛大に泣いた。

少しして

「落ち着いたかの？」

「はい。すいません。服を汚してしまって」

「いやいや。別にかまわんよ。これぐらいならすぐ乾く」  
服を汚してしまったのにこの人は笑って許してくれた。

「そうじゃ。ここらへんで自己紹介しておこう。」

わしの名前は桜華、字を紅桜と言っ。お主の名は？」

「あ、私の名前は関羽、字は雲長と言います。」  
私が名前を言うと桜華さんはすごく驚いていた。

「あ、あの私の名前変でしたか？」

「い、いやなんでもないのでしょ」

私がそういうと桜華さんはごまかすように笑っていた。

「それよりお主はこれからどうするのじゃ？」

頼れる人はおるのかの？」

桜華さんに言われて気付いた。

兄上が死んでしまった今、私は一人で生きていかなければならないことに。

「いません」

「ふむ、頼れる人はおらんのか。」

ならお主はどうしたいのじゃ？」

そう言われ、私はどうしたいのか自分に聞いてみた。

「私は強くなりたいです。私のような人を二度と

ださないためにも私は強くなりたいです」

「そうか。ならわしと一緒に旅をせぬか？」

「え」

「わしと旅をする間、お主を鍛えてやるう。どうじゃ？」

「願ってもない話ですがいいんですか？」

「くくく、よいよい。わしも一人旅は暇での。  
話相手がほしかったのじゃ」

「ならお願いしてもいいですか？」

「かまわんよ」

「これからよろしくお願いします」

罪なき人を救うためにも絶対に強くなりたい。  
私はひそかに決意した。

関羽 Side out

刹那 Side

まさかこの女子があのかつら長だったとはの。  
最初に聞いた時はかなり驚いたの。

「さてこれから一緒に旅をする仲じゃし  
わしの真名を教えておこう。わしの真名は刹那じゃ。  
よろしくの」

「あ、私の真名は愛紗といいます。これからよろしくお願いします。  
刹那さん」

「む、もう少しだけで呼んでもよいのじゃぞ？」

「い、いえ。助けてもらった人に対してそんなことは  
かたいやつじゃの。そうじゃ！」

「ならわしのことをさんづけ以外で呼ばなければお主を鍛えてやら  
ん」

「そ、そんな!？」

くくく、愛紗がわしのことを何と呼ぶか楽しみじゃの。

「で、では、その母上と呼んでもよろしいですか？  
ぶ!?! なんじゃと!?!」

「な、なぜそうなったのじゃ？」

「そ、それは・・・私の母は私を産んですぐに私を捨てました。  
それから兄上に拾われて育てられたのでだから母というものに憧  
れていたからです」

視線を逸らしながらいう愛紗はとても可愛いのがう。

「そうじゃったのか。ふむ、別にかまわんよ。わしが言いだしたこ  
とじゃし好きに呼ぶといい」  
わしがそういうと愛紗は顔を輝かせ、

「あ、ありがとうございます。母上」  
「やっぱり可愛いのが。」

刹那Side out

愛紗Side

刹那さんのことを母のようだと思っているときにくだけて呼んでも  
いいといわれ、  
つい母上と呼んでもいいですか？と聞いてしまった。  
しまった！？と思ったが刹那さんは普通に了承してくれた。  
私が喜んでいると

「そろそろ行くとしようかの」

「あ、わかりました」

「あ、すみません。少し待っていてください」

「どうしたのじゃ？」

「兄上にお別れを言いたいのです」

「そうか。うむ、行ってくるといい」

母上に許可をもらい、私は兄上の墓に行った。（愛紗の兄の墓は愛紗が喜んでいる内に刹那がつくった）

「兄上、今まで育ててくれてありがとうございます。」

私は絶対に強くなってもう私のような人を出さないようにしたいです。

これから私を見守ってください。さようなら兄上」

兄上に別れをつけ、私が母上のもとに戻ると

「ん？もうよいのかの？」

「はい。兄上にも別れを告げました」

「そうか。では行くとするかの」

「はい」

そうして私は村を後にした。



### 3話（後書き）

愛紗を弟子にしちゃいました。いろんなSSを見てきましたが愛紗を弟子にする

SSはなかったので書いてみました。がんばって書いていくので見守ってください

#### 4話（前書き）

遅くなつてすいません。テストやら卒業式やらが立て続けに重なつてしまいました

その代わり、少し長くなっているので見てください。

## 4話

愛紗と旅を初めて2ヶ月たった。

そういえば、旅をしている間に賊の退治などをしていたらいつの間にか二つ名がついておった。

わしは白猫で愛紗は黒髪の山賊狩りと呼ばれている。初めて聞いた時は笑いが止まらんかったのう。

生前も友人にまるで猫だなと言われておったしのう。

そして現在、約束通り愛紗に稽古をつけているのじゃが予想していた通り、

関雲長の名は伊達ではなくわしが教えることをどんどん吸収していく。

そうじゃ、愛紗の訓練をしていて気付いたのじゃが、この世界の女子は男子より力が強いみたいじゃな。

史実の関羽が使っていたとされる青龍偃月刀と同じ18kgの模擬刀を渡したのじゃが、

片手で持った時は顎が外れるかと思ったのう。

む、いかにいかに。稽古中じゃというのにほかのことを考えると

「いきます、母上」

「甘いぞ。愛紗」

真横から斬りかかってきた愛紗の模擬刀を刃を潰した莫耶で受け流す。

「く、まだまだ」

そういつて次は足を狙って振ってくる。じゃが

「まだまだ甘いぞ。愛紗」

迫ってくる模擬刀を足でとめ首に干将を突き付ける。

「どっじゃ？愛紗」

「ま、まいりました」

「よろしい」

「うう、母上に一度も当たりません」

「くく、簡単に当てられてはわしの威厳がなくなるのでな」

「あれだけ練習しているのになんで、当たらないんですか？」

「それはじゃな、お主は攻撃する時その場所を見るからじゃ。

じゃから攻撃する場所がわかるんじゃよ」

愛紗は真面目じゃからのう。それを悪いとは言わんが、戦いには不利じゃな。

「じゃからのう愛紗。攻撃するときフェイントを混ぜてみてはどうじゃ？」

「フェイントとはなんですか？母上」

「フェイントとは簡単に言えば嘘の攻撃じゃな」

「構えるのじゃ、愛紗。今からフェイントというものを見せてやる」  
「う」

そう言つて左から攻撃すると見せかけて蹴りを顔の真横で寸止めする。

「わかつたかの？今みたいに剣で攻撃すると見せかけて足で攻撃するとのことと言つのじゃ」

「なんとなくですがわかりました。母上」

「わかつたみたいじゃな。じゃあ今日の鍛錬はこれで終いじゃ」  
それにしても愛紗の成長速度は異常じゃな。

鍛えたとはいえ、僅か2ヶ月でそこらへんの賊に引けをとらんほどに強くなった。

自信が無くなるのう。

鍛錬を終え、野宿をしていた場所を離れ、わしらは董卓が治めている洛陽に来た。

史実では悪政を行っていたと言われているが、町の人たちに聞いたところこの世界の董卓は

悪政を行うどころか町の人たちからも慕われているいい領主みたいじゃな。

史実は当てにせんほうがいいみたいじゃのう。

「母上、これからどうするんですか？」

「ふむ、どうしようかの？」

「うーん、本当にどうしようかの？よし。

「そうじゃな、愛紗。小遣いをやるから昼まで好きなことをしてよいぞ」

「好きなことですか？」

「そうじゃ。食べ物を買つのもよし、装飾品を買つのもよし、好きなことをするといひ」

「わかりました、母上。それではまたお昼に」

「うむ、楽しんでくるといひ」

そして愛紗と別れたわしはというと

「暇じゃの〜」

食糧などは既に買ってあるし、おなかもすいておらん。

さて、どうしようかの？そうしてわしが暇を持て余していると

「だいじょうぶ！？月」と焦った女子の声がしてきた。

気になって見に行くと、いかにも悪い顔をした男が銀の髪をした小さな女の子を人質に金や食糧を要求しておった。

まさか街中で堂々と犯罪をするとはのう。

わしが思考にふけっていると、緑の髪をした女子が

「ちよつとあんた、月を離しなさいよ」と言っていたが男はまったく応じず、

「ならさつさと金と食糧を用意しろ」などとほざいておった。

仕方がないのう。あまり目立ちたくないのじゃが、

銀の髪の女子を助けると決め、わしはその騒動の中に入って行った。

最悪だとボクは思った。

ようやく空けることができた休日、月をつれて買い物をしていたら、ガラの悪い男に月を人質にとられてしまった。

この男は月を人質に金や食糧を要求していた。

どうしようとボクが思っていると人ごみの中から

一人の女性が出てきた。真っ白な髪を腰まで伸ばし、

鷹のように鋭い目をした人だった。

「ああん？だれだてめえは？」

「さっさとその子を離したらどうじゃ？」

「なにいつてんだこのあま？」

「じゃからさっさとその子を離せと行っておるのじゃ、この戯け。

それとも痛い目を見たいのかの？」

「てめえこの剣が見えねえのか？なにになんで離さなきゃいけないんだよ」

「はあ。忠告はしたぞ」

その女性はため息をつくとき、一瞬で月を人質に取っている男の前まで行くと

剣を持っていた腕を捻って剣を落とし、そのまま投げ飛ばした。

男は気絶しており、我に返ったボクは衛兵にその男を捕えさせた。すると

「詠ちゃん」と月が近づいてきた。

「月」とボクも月に抱きついた。

「あ、詠ちゃんちょっと待ってて」

そういうと、月は助けしてくれた女性のところに行ったのでボクも付いていき、

「あの、助けただきありがとうございます」

「ボクからも礼をいうわ。月を助けてくれてありがとう」

「くくく、どういたしまして」

その女性は笑いながら言った。

「失礼じゃが、名前を聞いても良いかの？」

「あ、私の名前は董卓です」

「ボクの名前は賈馱よ」

「ほう、ここを治めている領主殿じゃったのか。

わしの名前は桜華じゃ。よろしくの」

「桜華さんですね。こちらこそよろしくお願ひします」

「あ、あの桜華さん。よかったらお礼をさせてくれませんか？」

「いやいや、お礼がほしくて助けたわけではないかまわないのじゃ」

「でも助けただいたのにお礼をしないわけには」

「むう、なら飯を奢ってくれぬか？」



ボクは頭の中が真っ白になっていた。

賈馱Sideout

刹那Side

むう、愛紗のことを紹介したら董卓と賈馱が固まってしまった。  
そんなにおかしいのの？  
あ、再起動したのう。

「ねえ、桜華？どうみてもあなたの年と関羽の大きさが一致しない  
んだけど？」

ああ、そういうことか。

「愛紗はわしの義理の娘じゃからな」

「義理？...どういつことなの関羽？」

「私を育ててくれた兄が賊に殺されてその時に引き取ってくれた人

が母上だからです」

「ッ！…！ごめん」

「いえ、謝らないでください。たしかに悲しかったですが今は母上  
がいますから」

「ああ、そうじゃった。愛紗。助けた礼に今から董卓殿が昼飯を奢  
つてくれるそうじゃ」

わしがそういつと愛紗はため息をついて

「母上。また厄介事に首を突っ込んだんですか？」

「イ、イヤソンナコトハナイゾ？」

「棒読みなのですが母上」

「そ、そんなことよりさっさと飯を食いに行こうではないか」

「母上」

ジト目でわしを見てくる愛紗を尻目にわしは飯屋に入って行った。

「なんじゃ愛紗それだけしか頼まんのか？」

「はい。奢ってもらっているのですから」

「あの遠慮しなくてもいいですよ？」と見えてもこの町の領主ですから」

「い、いえ。そういうわけには」

「そうじゃぞ愛紗。別に遠慮せんでもよいぞ」

「母上はもう少し遠慮してください」

「なにを言う愛紗。奢ってくれるというんじゃから構わんではないか」

「もういいです。」

む、なぜ愛紗はそこでため息をつくのじゃ？

注文した料理が来たのでみんなで料理を食べていると

「金を出せ」と言っている男たちが入ってきた。

数は・・・6人か。

それにしても

「なぜ今日はこんなにもバカなやつらが多いのかの？」

「そんなこと言ってる場合!？」

「そうですね。母上。それより今あいつらをどうするか考えましょう」

「ふむ、ならわしが全員潰そうか？」

「できるの!？」

「簡単じゃ」

わしがそういうと、男たちが

「なにごちゃごちゃ言ってるだてめえら」

「兄貴、こいつらしい女ばっかですぜ」

「ん？おお、なかなかいい女たちじゃねえか。ついでにこいつらももらっていくか、姉ちゃんたち怪我をしたくなかったらおとなしく俺たちについてきな」

うるさいやつじゃのう。今は董卓殿と賈馱もいることじゃ、早く終わらせねばの。

「何故ついていかなばならんのじゃ、めんどくさい」

「ああ？お前今置かれてる状況がわかんねえのか？」

「分かっている上で言っておるのじゃが？」

「ははは、おもしれえ女だな。この剣が見えねえのか？」

そういつて男は剣を見せてくるが、バカじゃろこいつら。

わざわざ自分の武器を見せつけるとはの。まあ見せてくれたほうが対処しやすいしかまわんか。

さて、さっさと片づけるとするかの。  
まず、剣を突き付けている男の顎を殴り、脳震盪を起こさせ戦闘不能にする。

「な！？て、てめえやりやがったな」

ほかの男どもが激昂して襲いかかってきたが、ありがたいの。  
頭に血がのぼっているほうがやりやすいからの。

そして次々と向かってくる男たちを一人一人潰していく。  
後一人と言う時にその男がわしにはかなわんと悟って逃げようとしたが、

「逃がすわけないじゃろ」

逃げる男を気絶させ、男たち全員を縄で縛って衛兵に突き出していると店の店主が

「あ、ありがとうございます。おかげで店のお金を取られずにすみました」

「いやいや、たいしたことはしておらんよ」

「助けていただいたお礼として、料理の代金は結構です」

「む、そういうわけには」

「いえ、これは私の感謝の気持ちです。お金は絶対に受け取りません」

「むう、なら受け取るしかないではないか」

「ありがとうございます」

降りかかってきた

「お疲れ様です。母上」

愛紗が労ってくれた。やはり可愛いのう。

いかんいかん、わしはノーマルじゃ。

わしが悩んでいると賈馱殿が

「ねえ。気になってたんだけどあなたたち何者なの？」

ふむ、やはり軍師としては気になるみたいじゃな。

「わしらはただの旅人じゃよ」

「あんなに腕が立つのにただの旅人なわけないじゃない」

「そんなことをいわれてものう」

わしが困っていると董卓が

「詠ちゃん。桜華さんも困っているみたいだし、それぐらいにして  
おいたほうが」

「うう、月がそういうなら」

そういつて賈馱殿はあきらめてくれた。董卓殿に感謝じゃな。

そうして話をしている間に飯も食い終わり、飯屋を出た。

飯屋を出て少しして、董卓殿が

「あ、あの桜華さん。すみません、奢るって言っているながら逆に奢ってもらおう形になってしまっ

「仕方あるまい、あんなことがあるとはだれも予測できんじやろう」

「あの、その代わりというわけじゃないんですが私の真名を受け取ってくれませんか？」月！？」

「む、良いのか？」

「はい。2回も助けてもらいましたから。

私の真名は月です。関羽さんもそう呼んでください」

「月が真名を授けるならボクのこと詠でいいよ」

「ふむ、真名を授けられたのじゃからこちらも授けねばな

わしの真名は刹那じゃ」

「私の真名は愛紗です。よろしく願います、月さん、詠さん」  
真名の交換が終わり、話をしていると

「ねえ、あなたたちボクたちの軍にこない？」

「む、すまぬが遠慮したいのじゃ」

「理由を聞いてもいい？」

「単純な理由じゃ。単にわしが軍に属するのがめんどいだけじゃ」

「そ、そんな理由で・・・」

「あはは、すまぬな」

「うづん、別にいいわ」

「まあ、お主らに危ないことがあったら駆けつけてやるのじゃ」

「ふふ、ありがとう」

「さて、わしらもそろそろ行くとしようかの」

「もう行っちゃうんですか？」

「うむ、すまんの」

「いえいえ、また来てください」

「わかったのじゃ」

そして月殿たちに別れを告げ、わしらは洛陽を出たのじゃ。



#### 4話（後書き）

月たちと知り合いになってしまいました。反董卓連合で董卓側に参加するフラグが立ってしまいました。ちゃんと書けるかな・・・

## 5話（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません。これからもこんな感じに不定期に更新しますのでそれでもいいという方は見ていってください

## 5話

洛陽を出発して4日目、わしらは次の街を目指して歩いていた。

「母上。次に行く街はどこですか？」

「次に行く街は江東の小霸王と呼ばれている孫策が治めている建業じゃ。」

「建業ですか。わかりました母上」

「でも母上は絶対厄介事に巻き込まれると思います」

「なぜそう思うのじゃ？」

「母上が行く先々で厄介事に巻き込まれていますから。」

洛陽でもその前に寄った村でもさらにその前でも巻き込まれていないですか」

「さ、流石に今回は巻き込まれんじやろう・・・」

「私は巻き込まれると思います」

わしは巻き込まれ体質ではないはずじゃ。とそんな話をしている内に建業についた。

やはりあの孫策が治めているだけはあるのう。

街全体が活気にあふれておる。色々見て回りたいのう。

わしがそんなことを考えていると隣でくうくと可愛らしい音が響いた。

その音の発生源である愛紗を見てみると顔を真っ赤にしていた。

「今の腹の音はお主じゃな、愛紗」

「ち、ちがいます母上!」

「隠さんでもよい。腹がすくのは人として当たり前じゃからな  
とりあえず飯屋に行くとするかの」

「で、ですからちがうと」

可愛いのう。必死で誤魔化そうとしておるが  
わしの隣にはこやつしかおらんのじゃから誤魔化せんのかな。  
さてさてどこで食べようか、と考えていると  
少し離れたところから怒声が聞こえてきた。

「母上。やっぱり巻き込まれましたね  
そういつてわしをジト目で見てくる。」

「むう・・・巻き込まれんと思ったのじゃがのう。  
とりあえず行ってみるとするかなの」

本当にわしは巻き込まれ体質なのかのう・・・

愛紗を連れて怒声が聞こえた方向を見てみると

老婆を人質にした賊が女性に向かってなにかを要求しておった。

人数は老婆を人質にしているやつが一人、武器を持ってそばにいるやつが二人に

首領っぽいやつが一人か。

これなら弓を使えばすぐに終わりそうじゃな。

「愛紗。わしがやるからお主はじっとしておるんじゃぞ」

「わかりました母上。気を付けてください」

「うむ」

そういつてわしは少しはなれた家の屋根に行き弓と矢を投影した。

??? Side

やられた。私を可愛がってくれているおばあちゃんを人質に取られ、私は手を出すことができなかった。

おばあちゃんが人質に取られていなかったらすぐに八つ裂きにしてやるのに。

憤りを感じていた私に賊たちは、

「早く金と食糧を持ってこい！でないとこのばばあを斬り殺すぞ！」

「ははは、早く持ってきた方がいいぜ。あいつは短気だからな。間違つて殺しちゃうかもな」

「そうだぜ。あいつはすぐに頭に血が上るからな」

「きさまらー！ー！」

「おっと！動かないでもらおうか。このばあさんが死んでもいいんならべつだけだよ」

「ちっ！」

早くおばあちゃんを助けたいけど相手が剣を持っているから迂闊には手を出せない。いったいどうしたら・・・  
私が考えていると

「うわ！？」

「ぎゃあ！？」

どこからか矢が飛んできておばあちゃんを人質にしていた男とその男の近くにいた剣を持った二人に当たった。  
少しの間呆然としてしまったけどすぐに南海霸王を抜き、賊に斬りかかった。

おばあちゃんを人質にしていた男の首をはね、近くにいた二人も同じ末路をたどった。  
あとは一人だけね。

「さて、覚悟はいいかしら？」

「ひっ！？た、助け」

「おばあちゃんを人質に取っておいて私が許すとても思ってるの？」

「さっさと死になさい」

私が南海霸王で男を殺そうとすると

「や、やれ！」

男が私の後ろを見てそう言った。

私が急いで振り向くと賊の仲間が剣で斬りかかってきた。

しまった！？この距離じゃかわせない！

剣がどんどん近付いてくる。

「ごめん。冥琳」

私が親友に謝っていると

剣を持った男と後ろにいた男が頭を矢に貫かれて死んだ。

少し呆然としてしまったけどすぐに矢が飛んできた方向を見ると

少し離れた屋根の上にはいた白い髪をした若い女性が手に持った弓を下ろしていた。

その女性はすぐに屋根から降りてしまつて顔をよく見れなかった。

礼も言いたいし、冥琳に探してもらおうかしら？と考えていると

「雪蓮！」

人ごみの中から冥琳が出てきた。

「あ、冥琳」

「あ、冥琳じゃない。お前は何を考えている。あと少して死ぬところだったんだぞ!？」

「別に助かったんだからいいじゃない」

「いいわけあるかー」

本当に冥琳は心配性ね。それはともかく

「冥琳。ちょっと人を探して欲しいんだけど？」

「探してほしい人？」

「ええ。私を助けてくれた人よ」

「矢をはなった人か？」

「そうよ」

「わかったどんな容姿をしている？」

私は冥琳にその人の特徴を教え、探してもらった。会ったのが楽しみね。

雪蓮 Side out

刹那 Side

ふう、危なかったのじゃ。

矢をはなつて剣を持ったやつらに剣を落とさせたのじゃよかつたのじゃが、

まさかもう一人おつたとはのう。早めに気付いてよかつたのじゃ。屋根から降りて愛紗と合流した。

「相変わらず弓の腕前はすごいですね。母上」

「そづかのう？」

「そうですね。今まで母上は一度も弓を外したことがないじゃないですか」

「まあ、それは置いておくとして」

「置いておかないでほしいのですが」

「さっきの騒ぎで忘れておつたが飯屋に行く途中じゃったな。では行くとしようかの」

「はい。母上」  
そうして二人で飯屋に行った。

近くの適当な飯屋に入り、料理を注文して待っているとさつき助けた女性と眼鏡をした黒髪美女が入ってきた。なんか面倒なことになりそうじゃのう。

「あ、いたいた」

「雪蓮。この人か？」

「そうよ」

「ねえ、名前を覚えてくれない？助けてくれた礼を言いたいのわざわざ礼を言いに来たのか。真面目じゃのう。」

「わしの名前は桜華、こっちはわしの娘の関羽じゃよろしく」

「関羽です。よろしくお願いします」

「私の名前は孫策、真名は雪蓮よ」

「私の名前は周瑜、真名は冥琳だ。よろしく」

「む、真名を授けられたからにはこちらも授けねばのうわしの真名は刹那じゃ」

「じゃあ私も。私の真名は愛紗です」

まさかこの二人があ有名な孫策と周瑜だったとは。

「さつきは助けてくれてありがとう」

「いやいや別に大したことはしておらん」

「それでも礼をいうわ。私を助けてくれてありがとう」

「私からも雪蓮を私の親友を助けてくれてありがとう」

そういつて孫策殿と周瑜殿が頭を下げてきた。

「いやいや頭を上げてくれんか？別に礼が欲しくて助けたわけではないのじゃ」

「そう。でも礼はするわ。なにか望むものはあるかしら？」

「むう、さつきも言ったが別に礼がほしいわけではないのじゃが」

「それじゃ私の気がすまないのよ」

むう、こういうタイプはなにかいうまで絶対に引かないだろうし、  
この料金でも奢ってもらおうとするか

「ならこの料金を奢ってくれぬか？」

「そんなことでもいいの？」

「うむ」

「わかったわ。ならついでに私たちも食べていこうかしら？  
ねえ冥琳もどう？」

「そうだな私も昼は食べてないから食べていこう」

「ねえ、相席いいかしら？」

「ああ、かまわんよ」

そういつて孫策殿たちも料理を注文した。

注文した料理が来て食べていると孫策殿が

「ねえ、刹那って何者なの？」

「ただの旅人じゃよ」

「流石にあの距離で一本も矢を外してないのに  
ただの旅人はないと思うのだが」

「旅人で勘弁してほしいのじゃが」

「ふふ、わかったわ。そういうことにしてあげる」

「すまんのう」

「刹那、旅人なら私の所に士官しない？」

「誘ってくれるのは嬉しいのじゃが、すまんが断らせてもらうのじ  
ゃ」

「理由を聞いていい？」

「別に大した理由ではないのじゃが、  
単にめんどくさいだけじゃ」

「めんどくさいって・・・まあいいわ」

「ふふ、すまんのう」

そんな話をしている内に料理を食べ終わったのでわしらは飯屋を出た

飯屋を出て歩いていると愛紗が

「母上次はどこにいくのですか？」

「そうじゃのう・・・まあ自由気ままに旅をするだけじゃよ」

「わかりました母上」

愛紗と話をしている内に門についた。

「それでは、雪蓮殿、冥琳殿、さよならじゃ」

「ええ、さようなら」

「ああ、またな」

そうしてわしらは雪蓮殿と冥琳殿と別れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3433r/>

---

錬鉄の意志を受け継ぐ者

2011年7月22日01時16分発行